

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	自然対話における発話の修正と再構築
Author(s)	安齋, 有紀
Citation	フランス文学, 30 : 1 - 13
Issue Date	2015-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041124">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041124</a>
Right	
Relation	



## 自然対話における発話の修正と再構築

安齋 有紀

### 1. はじめに

自然対話では、発話者が自らの発話について語彙の選択や表現方法が適切ではないと判断する場合、また共発話者が発話内容を理解しているか、発話についてきているか確信がもてない場合、発話者は自らの発話の「見直し」と共発話者への「確認」を行う。そこで発話者は、状況に応じて先行発話を別の表現や、より具体的な例を用いて言い直し、その修正が適切に行われているか、共発話者の反応を再度確認しながら発話を続ける。さらに、共発話者も必要に応じて先行発話の聞き直しや言い直しを行うため、「発話者の働きかけと共発話者の反応」が繰り返される。このように繰り返される発話の修正、再構築、再導入という言語活動には、発話主体間における二つの次元の調整が必要とされる。つまり、発話者が自らの発話の妥当性を問うメタ・ディスコースレベルの調整と、発話内容についての共発話者との理解の度合いについての主体間調整である<sup>1)</sup>。発話の修正や再構築の場面でこのような二つの次元の調整が行われる場合は、人称表現が含まれる談話標識 (*tu vois / vous voyez, tu sais / vous savez, écoute / écoutez, disons, je veux dire, si tu veux / si vous voulez, etc.*) が使用されることが多い。これらの談話標識は、構成要素の人称や法が異なることから、発話の指示対象に対して、また共発話者に対して、発話者がどの立場から、どのような視点で、どのレベルでの共有を想定して発話の修正、再構築、再導入を行っているのか、それぞれの標識が示す発話態度は異なると考えられる。

本稿ではこれらの対話調整に関わる談話標識のうち、一人称複数（命令形）の形態で表される *disons* が示す談話における機能の特徴と、この標識によって導入される発話の修正、再構築、再導入のプロセスについて、特に共発話者の反応と周辺に観察される言語現象や音声の分析結果<sup>2)</sup> から説明する。

<sup>1)</sup> 1. メタ・ディスコースレベルの調整 (*ajustement métadiscursif*) : この調整は、発話者と発話内容に関わる調整である。より正確には、標識の直前に発話された内容とその後に発話される内容との間に行われる、発話者による調整である。

2. 共発話者との理解の度合いに関する調整 (*ajustement intersubjectif*) : この調整は、発話者と共発話者との関係の調整であり、正確には発話者が標識の直前の発話とその後続く発話の間で、共発話者へ自分の発話に対する何らかの「反応」を促す行為に結びついている。つまり標識を扶むことによって、発話者は相手がまず自分の発話を理解しているか確認し、相手の反応によって調整が必要だと判断した場合には次の段階で調整を行うのである（安齋, 2011, p.15）。

<sup>2)</sup> 話し言葉の分析単位と音声分析の指標（安齋, 2013, p.129-130, 2011, p.3-4）：話し言葉の資料を分

## 2. 先行研究

標識 *disons* についての主要な先行研究では、M.-M. de Gaulmyn (1987 : p.170-171, 178-179) が「opérateur métadiscursif」として *c'est-à-dire, par exemple, paraît-il, comme on dit, si on peut dire* と同じグループに分類している。用法としては、談話において先行発話の換言、修正、補足といった調整を行い、発話の連鎖を構築する機能があると説明している。また、まさに構築中の談話の推敲 (reformulation) の過程において、先行発話を修正し、必要があればそれに補足しながら発話を発展させていく機能をもつ標識として分類している。J. Authier-Revuz (1995 : p.183-190) は、発話の修正や再構築の機能はもちろんであるが、特にこの標識の一人称複数 (命令形) という形態が、*je* と *tu* の発話主体間に生じる不一致 (la non-coïncidence) を回避し、発話者が選択する語や表現の « nous-énonciateur » (*ibid.* p.183) として共発話者を取り込む機能を示していると述べている。M.-A. Morel & L. Danon-Boileau (1998 : p.104) は、« marqueur de la modulation de la qualification du référent » の一つとして、発話の指示対象の質的決定や構築中の発話の調整に関わる機能があると説明している。また、Authier-Revuzと同様にこの標識の機能は、その形態に特徴が見られると指摘し、発話者が発話の構築途中である不完全な状態の発話を共発話者に提示し、それを共発話者が共に修正していくように取り込むことで、発話内容の理解の度合いを調整しようという態度を示すと説明している。

以上の先行研究で示されている *disons* の基本的な談話機能をふまえ、次の第3節

---

析する場合、統辞構造の分節の指標となるのはイントネーション (ここでは、表現意図やモダリティに応じて発話の終結部に現れる声の高さの上昇や下降といった変動、抑揚、強度などの音声現象を指す) である。本稿では、音声現象から *paragraphe intonatif* (以下、パラグラフ: *préambule* [主題+様態] と *rhème* [述部] から構成される) という話し言葉の分析単位を設定している。M.-A. Morel & L. Danon-Boileau (1998) の対話理論に基づいて分析を行う。Morel & Danon-Boileauによると、音調を表す基本周波数 *F0* (*Fundamental frequency*: Pitch-単位Hz) と強度 *I* (*Intensity*: 単位dB) の組み合わせを中心に、ポーズ (休止)、語末母音の長音化、躊躇 (*eah*) の間隔などの音声現象の分析によって、発話および共発話者に対する発話者の態度を解釈することができる。*F0* (音調) は声の高さを表し (*H1*:100 Hz = 低、*H2*:200 Hz = 中、*H3*:300 Hz = 高)、*F0* が上昇または高レベルを示す場合 (*F0+*) は、共同発話行為の実行 (共発話者の同意/対立などの態度を受け入れる意思がある) を示す。*F0* が下降または低レベルを示す場合 (*F0-*) は、共同発話行為の切断 (発話者は共発話者の存在を考慮に入れず、自分の発話と向き合うかたちで発話を完結させる) を示す。強度 *I* は話し手の態度を示すもので、強度が上昇傾向 (*I+*) または中間値に留まっている場合 (*I=*) は、話し手が発言権を保持する意図を表し、反対に下降した場合 (*I-*) は、話し手は一旦発言を終了し、相手に発言権を譲る態度を示している。また、音調の上昇 (*F0+*) + 強度の下降 (*I-*) の組み合わせの場合は *préambule* の終わりを示し、音調の下降 (*F0-*) + 強度の下降 (*I-*) の組み合わせの場合はパラグラフの終わりを示す。なお、Morel & Danon-Boileau は *énonciateur* (発話者) と *locuteur* (話し手) という用語を使い分けているため、この注での訳語はそれに従っている。

分析には音声解析ソフト *Praat* を使用する。このソフトは <http://www.praat.org> より無料でダウンロード可。

では先に述べた通り、特に発話者の意図や働きかけに対して、共発話者がどのような反応を示し、発話が継続されていくのか、相互作用としての対話調整という観点からそのプロセスについて、自然対話資料<sup>3)</sup>における *disons* の表出例を用いて説明を試みる。

### 3. 自然対話における *disons* の表出例<sup>4)</sup>

(1) (パリにおけるホームレスの割合の時代による推移について話している。)

**spk3** : quand quand j'étais alors quand j'étais même + vraiment petit + y avait y avait beaucoup de clochards hein euh + à Paris dans le métro euh + et puis +

**spk2** : et puis moi j'habitais pas loin des Halles donc y en avait pas mal

**spk3** : ouais ouais + et puis on a on a parlé euh + plusieurs fois on a eu le sentiment + que + les clochards avaient disparu de Paris § oui § dans les {49} dans les années *disons* euh (h) {49} soixante / [quinze

**spk1** : [les trente glorieuses la fin

**spk3** : la fin sur la fin + sur la fin + euh soixante dix quatre vingt + oui c'est ça + ouais + soixante dix

(CFPP 2000, Paris 5<sup>ème</sup>, spk1 : F, spk2 : F, spk3 : M)

<sup>3)</sup> 本稿ではパリ第3大学の研究グループ (SYLED-EA2290) がインターネット上で公開している自然対話資料 « *Discours sur la ville. Corpus de Français Parlé Parisien des années 2000 (CFPP2000 : Université Sorbonne Nouvelle Paris 3)* » を使用している (公開アドレスは参考文献に掲載)。パリ市内 (3, 5, 7, 11, 12, 13, 14, 18, 20区) およびパリ近郊 (Ivry, Kremlin-Bicêtre, Saint-Ouen, Montreuil, Suresnes) 在住者が、自分の住む街の特色、日常生活で気になる問題 (住民、住宅、世代交代、移民、言語、教育、文化交流、余暇、地域産業、商業、経済、交通網など) について語っている。会話形式はインタビュー (パリ第3大学の研究員) を入れた計2~4人での座談会形式。

<sup>4)</sup> 例文に使用する記号

[発話の重複 (通常、2行にまたがる)

§ 共発話者の参入

+ ポーズ (休止) (+の数によって休止の長さの程度を示す)

/ ごく短い中断

:: 直前の音が伸びている (コロンの数によってその長さの程度を示す)

vi- 単語が完全に発音されないまま途切れている

(h) 聞き取り可能な吸気音 (数字がある場合は吸気音を伴ったポーズの長さを示す)

X 聞き取り不能箇所

' 語尾の母音が発音されていないか、非常に弱い (例: je crois→j'crois)

{数字} {}内の秒数 (単位centiseconde = 100分の1秒: 以下cs) の沈黙が続いている

(D数字) 最後に発音された母音が数字の秒数 (単位cs) 伸びている

なお、本稿の例文は筆者が音源を聞き直した上で秒数や記号など必要に応じて加筆している。

例(1)で *disons* の前後を見ると、まず標識の前では前置詞 *dans* と定冠詞 *les* が繰り返され、その繰り返しの間に49csのポーズ (*dans les {49} dans les années*: 5～6行目)がある。ここで発話者は、標識の挿入によって先行発話に続く表現をこれから提示する、つまり具体的な語または表現を「言う」ことを共発話者に示しているが、標識の直後にも躊躇のマーカ (*eah*) や49csのポーズが現れていることから、その段階では *années* に続く表現を発話者がまだ探している途中であることがわかる。その後、*soixante quinze* という数値を発話に導入しているが、*soixante* を発音したあと *quinze* を発するまでに、わずかであるがポーズがおかれている。この例における標識の表出位置と、標識の周辺に観察されたこれらの言語活動から、発話者は自らの発話を構築途中の不完全な状態で提示し、この標識によって共発話者に発話を補足、修正しながら共同で継続していくよう促していると考えられる。その結果、*spk3* が *quinze* と発音すると同時に、*spk1* は *spk3* の表現を別の表現で言い直し (*les trente glorieuses la fin*: 7行目)、さらに *spk3* は *spk1* の表現を繰り返し、それに同意する形で発話を展開している (*la fin sur la fin* (…) *oui c'est ça + ouais + soixante dix*: 8行目)。

音声現象 (脚注2) 参照) としては、音調 *F0* は低いレベルに留まっており、発話者が自らの発話の妥当性と向き合う態度を示している。それに対して、強度 *I* は高い位置を示し、発言権を保持したいという意図を示している。よって、この例にお

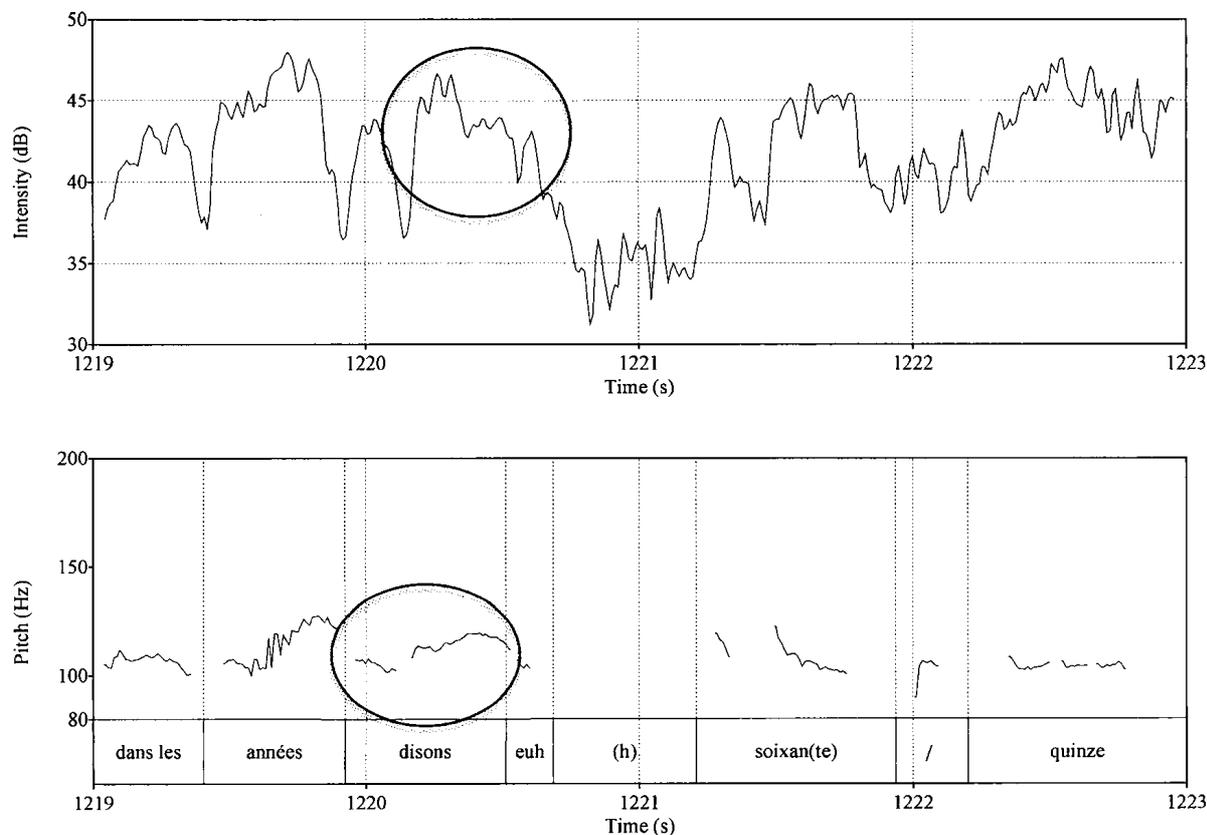


Fig.1 - ex. (1) *spk.3* *F0* : 80-200Hz *I* : 30-50dB

ける組み合わせ (F0-, I+) は、発話者が自分の発話を不完全なものとして判断し、適切な表現を探しながら発話を修正している途中であるため、このまま発言を続けるという発話者の意図を示すと言える (Fig.1)。

(2) (自分の住む quartier の時代による変化について話している)

**spk1** : euh + alors vous avez parlé des + des changements dans le quartier euh depuis donc votre adolescence

**spk2** : [oui un peu plus la jeunesse + oui euh

**spk3** : [oh une adolescence un peu tardive *disons* quand on [avait vingt ans

**spk1** : [quand vous étiez  
quand vous vous étiez étudiants § ouais oui oui §

**spk2** : ben la la fac exist- enfin existait mais pas sous cette forme-là

(CFPP 2000, Paris 5<sup>ème</sup>, spk1 : F, spk2 : F, spk3 : M)

例(2)では、spk1の adolescence (2行目) という表現について、spk2が une adolescence un peu tardive (4行目) と補足・修正し、さらに標識 *disons* によって quand on avait vingt ans (4行目) という具体的な年齢を含む表現を提示している。続いて、この標識によって発話者が新たな表現の提示を開始した直後に、spk1はspk3の quand と同じ副詞から始まる発話によって、別の表現 (quand vous vous étiez étudiants : 5～6行目) を提案している。例(1)の場合と異なり、この例では標識の周辺に躊躇のマーカ―やポーズは観察されないが、発話者と共発話者が発話の指示対象について交互に、あるいは同時に (= chevauchement des paroles) 新たな表現を補足、修正しながら「とりあえず」次々と提案していることから、より適切で具体的な表現を共同で探し、発話内容の理解についての「ずれ」が生じないように発話者が主導する「環境」がこの標識の導入によって整えられているのではないかと考えられる。

音声面では、例(1)と同じ特徴が観察された (F0-, I+)。発話者は適切な表現を探しながら発話の修正、再構築過程にあるため、発言は継続するという意図を示していることがわかる。

(3) (spk2が Rennes 通りの変化について話している)

**spk2** : oui puis là en c'moment ici c'qui agite beaucoup c'est la transformation d'la rue d'Rennes parc'qu'il est question il est fortement question de + de toucher à la rue d'Rennes et de + faire qu'cette rue qui est vraiment + pas une rue sympathique bon ben c'est elle est pas antipathique mais j'veux dire qu'c'est une

rue où on a pas d'plaisir à s'promener ils voudraient en faire + *j'sais pas comment ça s'appelle* un quartier civilisé

spk1 : le terme n'est pas très réussi (rires)

spk2 : le terme n'est pas réussi du tout + parce que on peut pas dire qu'elle est non civilisée mais *disons* euh qu'on qu'on réglemente un petit peu les flux des gens des voitures des camions des autobus et cetera et alors ça provoque des forcément y a des gens qui sont très pour des gens qui sont très contre y a des gens qui les les commerçants

(CFPP 2000, Paris 7<sup>ème</sup>, spk1 : M, spk2 : F)

例(3)では、spk2がrue de Rennes についてどのように形容するべきか、適切な表現を探しながら複数の言いかえを行っている（3～6行目）。その過程において、発話者が発話の指示対象（rue de Rennes）の特徴を的確に示すような別の呼び方「*une rue X*», 「*un quartier Y*」を探すという言語活動の途中にあることを示す *j'sais pas comment ça s'appelle*（5～6行目）という発話が観察される。ここでは、さらに *j'sais pas* によって、発話者が言葉探しに行き詰まっている状態にあり、この段階で提供できる情報がないため共発話者による助言を求めると同時に、この作業を引き継いで欲しいという意図が示されている。この表現のあとに提示された *un quartier civilisé*（6行目）という最終的な言い直しを受けて、spk1はspk2が言い直した最後の表現が適切ではないと述べているが（*le terme n'est pas très réussi* : 7行目）、それに対してspk2は「全くうまくいっていない」とspk1と同じ発話を繰り返し（*le terme n'est pas réussi du tout* : 8行目）、それを認めている。つまり発話者（spk2）は、自分の発話が不完全であり、言いかえに成功していないことを共発話者も理解していると認識している。そこで、続く発話では *disons* によって構築段階にある不完全な発話を導入することで、共発話者が共同で指示対象の形容としてより適切な表現を提案し、「言い直し」という言語活動が進展するように促している。

音声特徴としては、音調を示すF0と強度を示すIがともに高いレベルにあり、続く発話でもそのレベルが保たれている（F0+, I+）。これは、発話者が標識の後に続く表現に照準を合わせていることを示し、自らの発言権を保持したまま、共発話者をその点に向かわせようとする意図が読み取れる（Fig.2）。

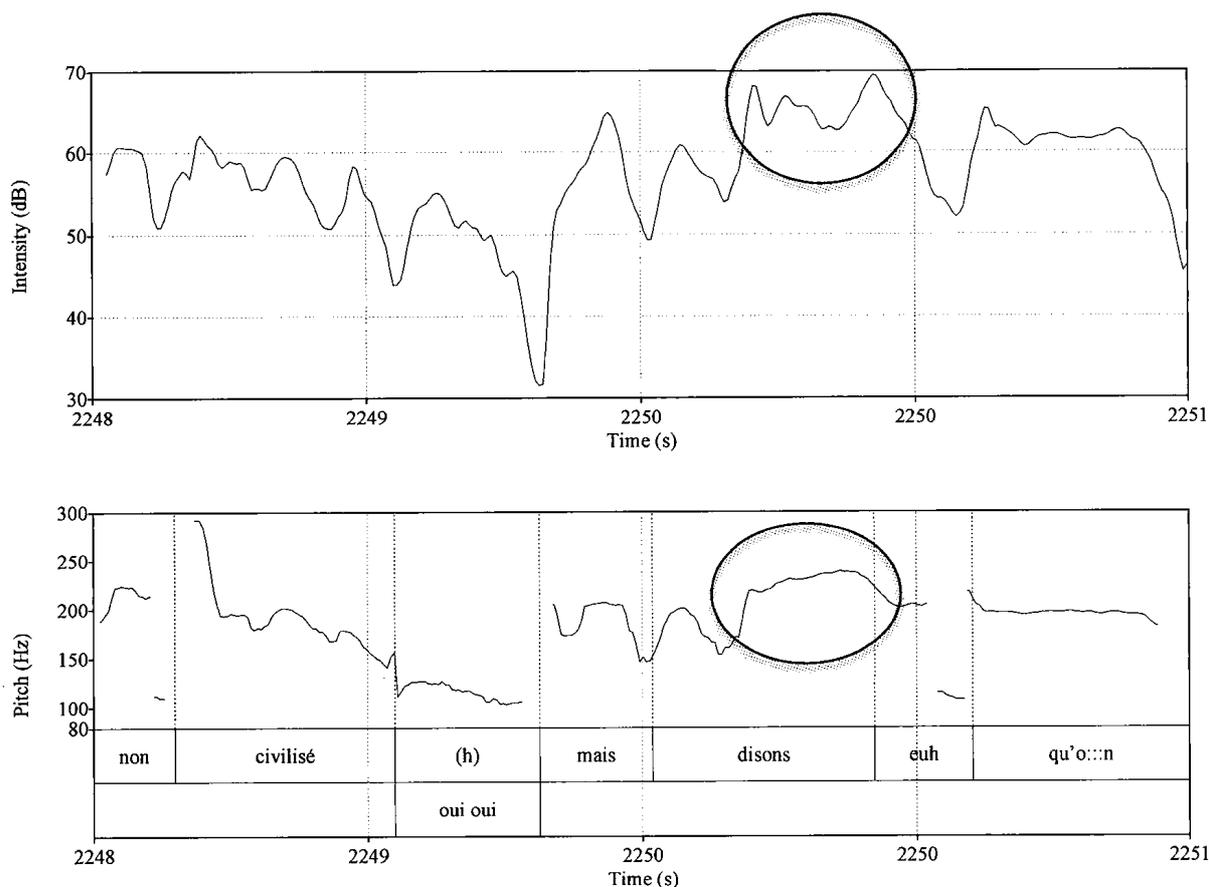


Fig.2 - ex.(3) spk.2 F0 : 80-300Hz I : 30-70dB

- (4) (パリ市内での交通手段と移動の範囲・頻度について、車はほとんど使うことがなく、さらに自分たちが住む区から仕事以外であまり出ることがないと話している。)

**spk1**: ah oui oui

**spk3** : on s'en sert le week-end ah non pas aller XX euh on s'en sert le week-end: si on veut aller au bois c'est vrai qu'on prend la voiture pour aller au bois d'Vincennes + ou si on sort on quitte Paris quand on part en vacances on la prend mais à P- à Paris jamais +

**spk3** : vraiment ou

**spk2** : et alors

**spk3** : alors il faudrait:

**spk2** : une journée où vous circulez {100} pas mal *disons* est-ce que vous pourriez: décrire {83} euh:: (D 75) les déplacements avec précision {172} une journée

(CFPP 2000, Paris 12<sup>ème</sup>, spk1 : M, spk2 : F, spk3 : F)

この例では、skp2（インタビュアー）が質問の対象（une journée où vous circulez pas mal：9行目）について言いかけ、発話が不完全な状態で構文のレベルから構築し直した発話（疑問文）を *disons* によって導入している。この疑問文には、比較的長いポーズ（80～170cs）や躊躇のマーカ（*eah*）が現れていることから、この段階においても発話者はより適切な表現を探していることがわかる。このように発話の実現過程であることを示す言語現象が現れているにもかかわらず、例(1)や例(2)のように共発話者が発話者と交互に、あるいは同時に別の表現を提案しないのは、*disons* によって導入された直後の表現が *est-ce que*… という疑問詞だからであり、spk3はspk2による発話（疑問文＝質問）を最後まで聞く姿勢を保っていると考えられる。

音声特徴は、例(3)と同じく音調を示すF0と強度を示すIがともに上昇を示している（F0+, I+）。この例において、音調の上昇は発話者が *est-ce que* から始まる次の発話に焦点を当てていることを示し、次の発話が共発話者にとって重要な情報であることを強調しながら、自らの発言権を保持して発話を続けていることが読み取れる（Fig.3）。

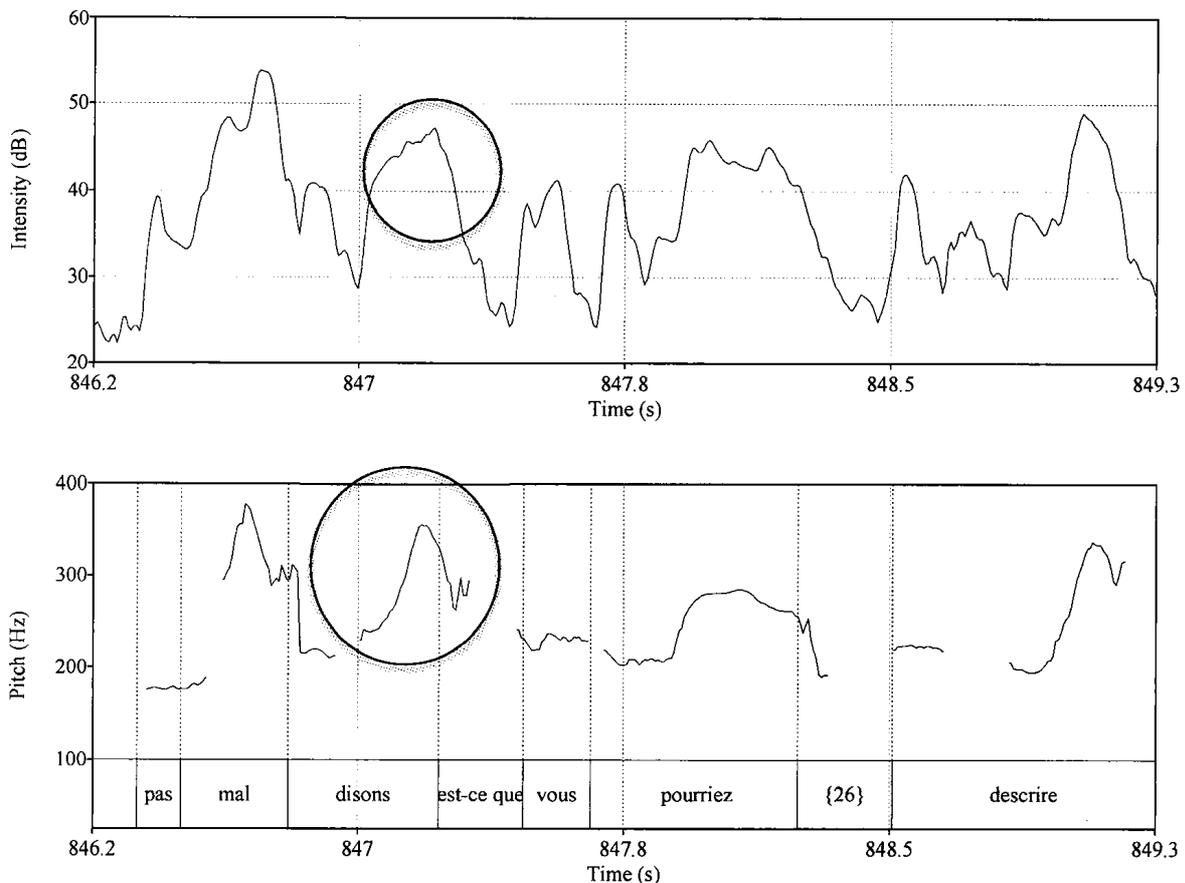


Fig.3 - ex.(4) spk.2 F0 : 100-400Hz I : 20-60dB

(5) (パリの路上生活者について話している。)

**spk1** : mais on s'abime vite dans la rue + donc c'est peut-être un choix à quinze ans et qu'est qu'on XX

**spk3** : peut être + oui oui peut être hein + mais je veux dire que euh + je pense que + pour certains mais + extrêmement minoritaires euh + ça a pu être un choix je pense que pour les autres c'est des gens qui sont euh + mmm + euh + c'est des + c'est des étrangers + que que je fréquente euh + par ailleurs au centre social + je travaille avec Julie hein donc c'est un + thème sur lequel je suis assez {46} sensibilisé *disons* euh + mmm {50} c'est c'est c'est des gens qui sont complètement exclus de la société détruits par la société et cetera

(CFPP 2000, Paris 5<sup>ème</sup>, spk1 : F, spk3 : M)

例(5)における*disons*の表出位置については、音声面の分析により音調 (F0)・強度 (I) とともに下降する特徴 (F0-, I-) が観察されたことから、標識が発話シーケンス (パラグラフ) の終わりを示していることがわかる (Fig.4)。spk3は、3行目のje veux dire que, je pense que…という表現によって路上生活者についての発話者の解釈を導入し、5～6行目ではrhème (c'est…)の展開においてさらに言い直しが繰り返されている。その過程では、同じ語の繰り返し、躊躇のマーカ (euh)、短いポーズ (+) が観察されることから、発話者は適切な表現を探しながらrhèmeを構築している途中であることがわかる。続いて、発話者はdonc (7行目) によって先行発話で提示された内容についての情報を一旦集約したあと、次のrhèmeを開始し (c'est un …)、標識*disons*によって発話を閉じている。ここでの*disons*に表れる音声特徴としての強度Iの下降は、共発話者に発言権を譲り、発話への参入の合図を示すものであるが、それはspk3が発話の指示対象についての適切な表現を探しながら発話を組み立てている間に共発話者の介入がなかったことから、発話内容の理解にずれが生じていないか共発話者に確認するために、自分の提示した発話に対する反応を*disons*によって促そうと自らの発話シーケンスを一旦閉じていると考えられる。結果的に、*disons*で発話を閉じたあとにポーズがおかれているが、共発話者が発話に参入してこないため、発話者は5～6行目のrhème (c'est…)を継続している (9行目)。

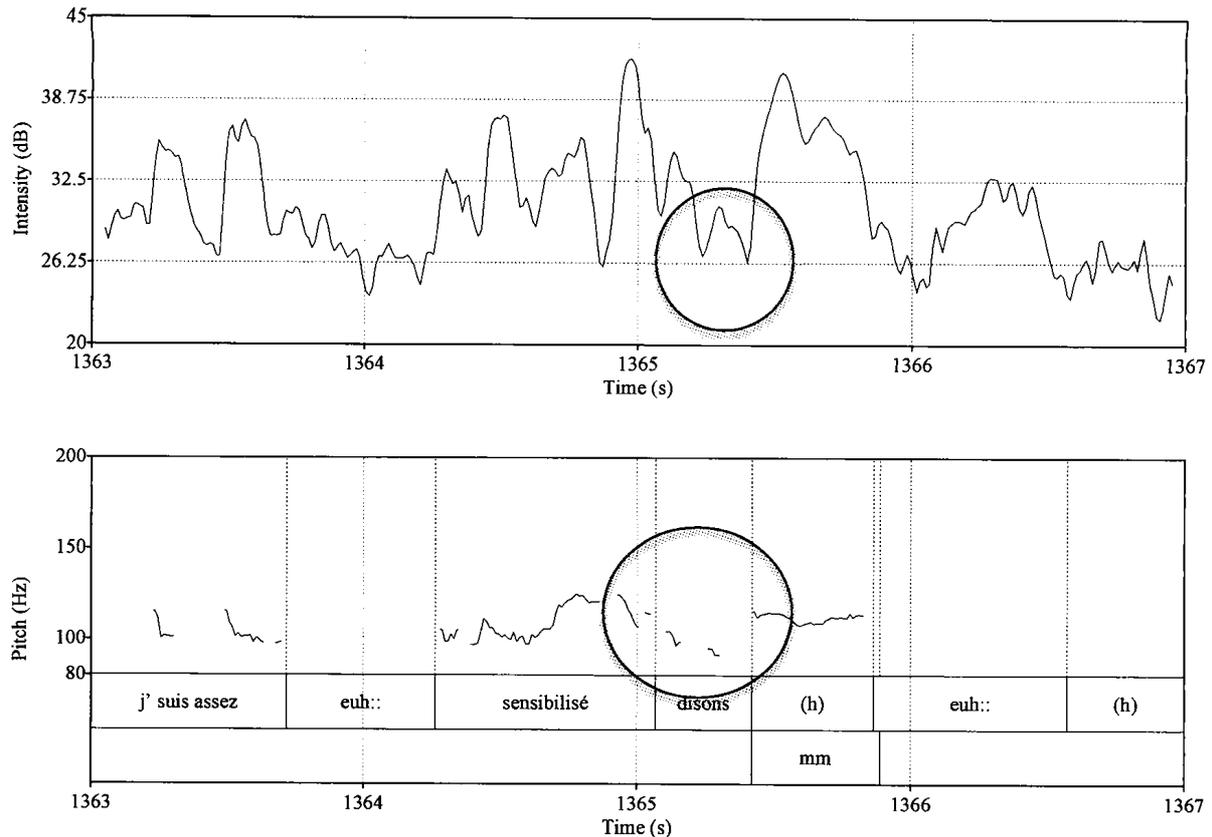


Fig.4 - ex.(5) spk.3 F0 : 80-200Hz I : 20-45dB

また、次の(6)のように標識の直後に発話者が何か言いかけている場合に、共発話者が次の発話を重ね、それに対して発話者がその場で発話を中断し、完全に発話のターン交代をする例もある。このような表出例から、*disons* には発話者がこの標識によってこれから導入しようとする表現が確実なものではなく不完全なものであるため、さしあたり発話の進展を妨げず、発話内容の理解のずれが生じないように続けようとした発話を中断し、共発話者に発話の継続を任せるといった対話調整の機能もあるのではないかとと思われる。

(6) (spk2が学生時代にどのような場所に通っていたか話している。)

**spk2** : qu'est-ce qu'on faisait quand on était une jeune fille de Duruy ? et bien on allait on faisait partie des jeunesses musicales de France + et y avait un + rue d'Babylone une librairie qui était un dépôt si j'peux dire des jeunesses musicales de France + et on prenait des places pour aller au concert à l'opéra et cetera on allait voir Gérard Philippe jouer le Prince de Hombourg on allait au TNP on allait on faisait des tas d'choses comme ça on allait au cinéma et euh et ben *disons* [XX

spk3 : [et là les parents vous laissaient aller

spk2 : ah oui sans problème + oui oui + oui ça sans aucune difficulté

(CFPP 2000, Paris 7<sup>ème</sup>, spk2 : F, spk3 : F)

以上の表出例の考察から、発話者が自らの先行発話を別の表現に言い換え、それを標識 *disons* によって共発話者に提示する場合、標識が表出する周辺で発話者が発話の実現過程にあることを示す言語現象（同じ語の繰り返し、躊躇の標識 *euh*、ポーズ、語末母音の長音化など）により、発話者は先行発話の言い換えとしてどのような表現が適切であるか、語あるいは表現を探しながら発話を構築している過程にあることがわかる。そこで発話者は、その過程で選び抜いた最も適切だと判断する表現を共発話者に提案するのではなく、言い換えが不完全な状態であっても「とりあえず」言葉にしようとする段階で共発話者にそれを示し、発話を進めることで、共発話者の側からもより適切な表現が提案されるよう働きかけ、共発話者と共同で発話の補足、修正、再構築を進める環境を整えている。よってこの標識には、発話内容について主体間での理解の「ずれ」が生じないように共発話者を主導していく対話調整の機能があるということがわかる。

また、この対話調整機能は *disons* の形態的な要素（«je + tu / vous » を含む *nous* の命令形）が基本となっている。同じく先行発話を言い直す場面で使用される *je veux dire, si tu veux / si vous voulez* では、je / tu, vous という人称が標識の構成要素として形態上に現れているため、発話者—共発話者の立場が明確に示されるが、*disons* にはその形態からもこれらの談話標識の調整機能とは異なる「共同作業による調整」という別の特徴があると言える。本節で取り上げた例に見られる発話主体間での「発話者の働きかけ」と「共発話者の反応」という相互行為の特徴からみても、この標識には「発話の参与者」としての共発話者の立場とは別の「共同調整者」としての立場・視点から、発話の指示対象についての先行発話の修正や補足を提案し、発話を再構築し、展開させるように、共発話者に働きかける機能があると言えるのではないだろうか。

音声現象については、音調 F0 と強度 I の組み合わせに 3 つのパターン (F0- & I+, F0+ & I+, F0- & I-) が観察されたが、それぞれの例を検証した結果、同じ標識であっても先行発話の進行や共発話者の反応によって、対話調整のために発話者が示す発話態度に変化が認められることを確認できた。

#### 4. おわりに

本稿では、書き言葉や虚構対話（小説における会話部分や映画のシナリオなど）

に対して、自然対話という発話状況に必然的かつ特徴的に現れる「発話主体間調整」という相互行為について標識 *disons* の事例を見てきた。この標識によって導かれる発話の修正、再構築という発話主体間で交わされる一連の言語活動は、発話内容について主体間での理解の「ずれ」が生じないように共発話者の認知に合わせることをだけを意図した「調整」ではなく、「ずれ」が生じる可能性がある場合に、それを共同で補整する立場に共発話者を導くことを考慮に入れた調整である。発話の指示対象について、先行発話では言い直しが不完全な状態であった語や表現を敢えてその状態で提示し、複数の言い直しの候補を発話者と共発話者が互いに挙げるような発話状況を発話者が整え、共同でより適切な形に修正し、続く発話でそれを再導入することによってさらに発話を展開していくよう共発話者に促すという発話者の態度がこの標識の表出によって示されていると言える。

また、発話者は発話の指示対象の「概念」について、発話者の視点から自分なりの話の使い方や表現を共発話者に提案すると同時に、共発話者からも何らかの提案をするように促していることから、共発話者と共有可能な認知領域を拡げること目指していると考えられる。このように、談話標識の機能が共発話者の認知領域（語用論レベル）と指示対象の「概念」（意味論レベル）の両面にわたるという点について、その両レベルがどのように関与しているかを明らかにすることも検討すべき問題であると思われる。そのために、本稿で取り上げた標識を含め、これまで個別に考察をすすめてきた人称表現を含むタイプの談話標識 (*tu vois / vous voyez, tu sais / vous savez, écoute / écoutez, si tu veux / si vous voulez*) の表出例に加え、発話の修正から再構築、発展という対話調整のサイクルにおいて使用される頻度の高い談話標識の表出例についてコーパスをさらに拡げて収集し、同じ場面での使用頻度が高い標識や、発話の流れにおいて標識が表出する順番などに着目しつつ、談話標識および標識の周辺に観察される言語要素の語彙・統辞・音声面での分析からそれぞれの標識が示しうる発話機能、対話における発話の修正、再構築、再導入のプロセスについて今後さらに整理していきたい。

本稿では標識 *disons* の構成要素である *dire* という動詞が談話標識の機能にどのように関与しているのか言及しなかったが、発話の言い直し、修正、再構築に関わる標識で同じく動詞 *dire* を構成要素とする *c'est-à-dire, cela (ça) veut dire, autrement dit, comme on dit, je veux dire, si on peut dire* などについても先行研究を精査したうえで、自然対話コーパスでの表出例を意味論、語用論的観点からだけでなく、動詞の用法を中心とした統語論的観点からも分析し、本稿で扱った標識を含めてこれらの標識の特徴について検討することを次稿以降の課題としたい。

## Bibliographie

- APOTHÉLOZ, D. (2007). "Note sur l'activité de reformulation dans la conversation", M. Kara (ed) *Usages et analyses de la reformulation*, Recherches linguistiques 29, Université Paul Verlaine – Metz, p.145-162.
- AUTHIER-REVUZ, J. (1995). *Ces mots qui ne vont pas de soi Tome 1*, Paris, Larousse.
- AUTHIER-REVUZ, J. (1994). "L'énonciateur glosateur de ses mots : explication et interprétation", *Langue française* 103, p.91-102.
- BRANCA-ROSOFF, S., FLEURY, S., LEFEUVRE, F., PIRES, M. (2009). *Discours sur la ville. Corpus de Français Parlé Parisien des années 2000 (CFPP2000)*, <http://cfpp2000.univ-paris3.fr/>
- DE GAULMYN, M.M. (1987). "Reformulation et planification métadiscursive", *Décrire la conversation*, J.Cosnier & C.Kerbrat-Orecchioni (eds), Presse Universitaire de Lyon, p.168-198.
- KARA, M. (2006). "Aspects polyphoniques des reformulations et des paraphrases pragmatiques", L. Perrain (ed) *Le sens et ses voix. Dialogisme et polyphonie en langue et en discours*, Recherches linguistiques 28, Université Paul Verlaine – Metz, p.435-460.
- NEVEU, F. (2003). "La glose et le système appositif", A. Steuchardt & A. Niklas-Salmien (eds), *Le Mot et sa glose*, Aix-en-Provence, p.143-167.
- NØLKE, H. (2006). "Pour une théorie linguistique de la polyphonie : Problèmes, avantages, perspectives", L. Perrain (ed) *Le sens et ses voix. Dialogisme et polyphonie en langue et en discours*, Recherches linguistiques 28, Université Paul Verlaine – Metz, p.243-269.
- MOREL, M.-A & DANON-BOILEAU, L. (1998). *Grammaire de l'intonation. L'exemple du français oral*, Paris, Ophrys, Bibliothèque de Fais de Langues.
- ROSSARI, C. (1994). *Les opérations de reformulation*, Berne, Peter Lang.
- 安齋有紀 (2013). 「発話主体間の視点を調整する談話標識」, 『島大言語文化 第35号』 島根大学法文学部紀要 言語文化学科編, p.127-146.
- 安齋有紀 (2011). 「自然対話における談話標識の表出と調整機能」, 『フランス語学研究 第45号』, p.1-18.